



Niigata University
Campus Magazine

Campus forum

新大広報

新潟大学広報誌

NO.
145
7月号

キャンパス・オープン

新潟大学とは何だ！

●第1特集

「研究とは何だ！ — 新大の知性と地性 —」

●第2特集

「青春とは何だ！ — 歩き始めた若者たち —」

●健康コラム

「患者さんが教えてくれたこと」

●こちら就職部

●キャンパスあれこれ

新潟大学全学講義 講師 羽 雄二（こだま ゆうじ）

「人間として生きたい — ハンセン病元患者の声を聞く —」

●基幹・環境整備の紹介



「研究とは何だ！
—新大の知性と地性—」

人文学部

古厩 忠夫 教授

(専門分野：東洋史、環日本海地域史)



古厩忠夫プロフィール

古厩 忠夫

Tadao FURUMAYA

新潟大学人文学部教授
新潟大学環日本海研究会会長

1941年長野県生まれ。

東京大学文学部東洋史学科卒業。

専攻——中国近現代史。

著書：『新潟県の百年』（共著、山川出版社）

『東北アジア史の再発見（環日本海叢書3）』（編、有信堂）

「裏日本」という言葉は 20世紀を象徴する言葉であり、 日本の近代化の 問題性を衝く存在である。

できることを一つずつやっておこうと考えて、新潟在住二十五年の総括をしてみようと思い、完成させたのが「裏日本」です。

5年後生存率4割と宣告

1994年「裏日本」の執筆依頼直後、胃癌が見つかりました。早期癌のつもりだったのですが、ステージⅢまで進んでいることが分かって、全摘手術を受けることになりました。主治医から、「5人のうち2人は5年後にも生きていられるとみています。」と言われました。つまり、5年後の生存率が4割ということです。驚きましたが、この年はプロ野球のイチローが4割に挑戦して届かなかった年で、私は4割と言うのは高い確率なんだと自分に言い聞かせました。そして5ヶ年計画を立て、やり残したことを一つずつやっておこうと考えました。その一つとして、新潟在住25年の総括をしてみようと思い、完成させたのが「裏日本」です。

田中角栄をめぐる新潟と東京の温度差

田中首相が誕生した1972年に新潟大学に赴任しました。新潟県初の総理大臣の誕生ということで地元は沸きました。その後ロッキード事件により退陣、そして逮捕。その年に行われた総選挙で、自民党は大敗しましたが、獄中の田中だけは断トツのトップで当選しました。新潟の選挙民に対する批判は厳しく、上京するたびに、「選挙民の意識の低さ」「目先の利益に走る民度

の低さ」などの批判を聞かされました。これに対して「新潟日報」は反論の社説を出しました。「三区有権者は、新潟県が歴史的にみて決して日の当る政治や行政的分配を受けておらなかったのも、その遅れを取り戻す必要があると直感している。つまり、いわゆる地域エゴを発揮して地元利益を求めているのではなく、太平洋沿岸地方や大都市に比べてなおも過小すぎた国家投資の是正を求めているにすぎない」と。田中角栄をめぐる新潟と東京の温度差、正反対のまなざしに衝撃をうけました。

「裏日本」とは自然地理的概念ではなく、 社会文化的概念

「裏日本」とは、本州の日本海に臨む一帯で、主として北陸・山陰をいいます。これは、単に自然地理的概念ではなく、日本の近代化のなかで「表日本」に対するヒト・モノ・カネの供給地とされていくなかで形成された政治的産物で、社会的経済的概念なのです。

表日本の高度成長は、裏日本をはじめとする地域の労働力や資源・市場を前提として、はじめて可能になったものでした。日本列島の「総表日本化」＝「裏日本なき表日本化」はあり得ません。田中角栄の日本列島改造論はそれを無視したものでした。



「表」の発展のために「裏」が欠かせなかったという事情は、「裏日本」が日本の近代化の問題性をあらわす存在であることを示しているのです。

「裏日本」の歴史は日本の20世紀史の本質

「表日本」なしに「裏日本」を概念することはできないし、逆に「裏日本」なしに「表日本」はあり得ませんでした。「表」「裏」一体の概念であって、「表」の発展のために「裏」が欠かせなかったという事情は、「裏日本」が日本の近代化の問題性をあらわす存在であることを示しているのです。「裏日本」という言葉にこめられた実態や意識は今日も無くなっていません。

「裏日本」という言葉が1900年頃から社会的格差を表現する言葉として登場したということは、「裏日本」という言葉は20世紀を象徴する言葉であり、その歴史は日本の20世紀史の本質的な側面を示すものといえましょう。

求められる「表」「裏」一体の近代化

「裏」を踏み台とした「表」中心の経済効率性の論理は、いま問い直されようとしています。「裏」が「表」化を目指すのではなく、「表」のあり方自身を問う動きが現実にあられています。生産力至上主義の時代を超えようとするいま、さらにはアジアのなかの日本という位置づけが深まるいま、日本の近代化を、「裏」と「表」を一体としてとらえることが、「裏」の人にも「表」の人にも求められていると思います



す。このことを抜きにした、東京による「新潟の民度の低さ」批判は、「五十歩百歩」だと思います。

巻町の「裏日本」を超える試み

巻町民のなかには原発に頼らない町づくりの方向性がみえつつあったことが、原発を拒否する投票結果を生んだのではないのでしょうか。原発反対グループから出された主張には、「原発を作るなら電気を使う東京に作れ」というような「裏日本イデオロギー」的なものがまったく見られませんでした。住民投票後、「巻ビジョン研究会」というネットワーク組織が誕生し、巻町のビジョンづくりにとりくんできました。

今後は地域の自律性重視・地方自治権強化・多様性・生活と文化重視・低成長などの方向性が目指されるべきだと思います。



今後は地域の自律性重視・地方自治権強化・多様性・生活と文化重視・低成長などの方向性が目指されるべきだと思います。

裏日本
—近代日本を問いなおす—
著者：古厩 忠夫
発行：岩波新書
700円（税抜）



●インタビューを終えて



「中学時代の先生の言葉
が鮮明に蘇ってきた。」

古厩教授のインタビューは、松風会館の会議室で行われた。外の陽ざしはもう夏を思わせるくらい強烈であったが、エアコンの効いた室内ではうとうとしなくなるような昼下がりであった。

そんななか、古厩教授の話を伺いながら窓の外に目をやり、ぼんやりと中学時代を思い出していた。その社会科の先生は思想的には左翼系でラジカルな部分も持っていたように記憶しているが、人間的にはきわめて常識的で物静かな印象であった。前後の状況は思い出せないが、あるとき憤り

を抑えきれずに「自らが裏日本というのはやめようじゃないか」と語気を荒げて言い放った。それまで意識せずに使っていたが、「そうか、裏日本というのは差別用語だったのか」とはじめて気づいた。それから数年を経ずして、マスコミから「裏日本」の文字はほとんど消滅した。70年代半ばのことだったと思う。

今回も142号につづいて撮影班ということで気楽に後からついていけばいいと高をくくっていたので、突然インタビュー後記を執筆するはめになって、その準備不足を反省している。しかし勝手ながら、それぞれの先生のもっておられる雰囲気や人間性を写真を通して多少とも感じ取っていたのであれば、お役目は果たせたと思っている。

（歯学部 川瀬知之）

「研究とは何だ！
—新大の知性と地性—」



市場経済価値とそこからこぼれた価値をつなげる 新しいネットワークづくりが求められている。

普遍から具体へ——現場が大学

高度経済成長時代のド真ん中で育ってきた、大学もそのさなかにいました。そこでは「普遍的でないものは学問にあらず」と教わりました。工学部の場合、数値化できて誰でも時間や場所に関係なく分かるようにすることが重要でした。歴史や地域性などはあまり重要視されませんでした。修士時代に河川研究室にいて、ダムの統合管理を研究していました。コンピューターでダムを操作して、効率的に使うという研究でした。しかし、現場を知らずにコンピューターだけの議論ではおかしいと思っていました。その後、現実の川を見て歩こうと思い、毎週のように利根川を見て歩きました。

利根川について論文を書きました。内容の半分位は歴史的な内容で、工学部のドクター論文にしては数式が一つもなく、利根川という具体の川を扱っているので普遍性

がないということで審査員から批判を浴びました。が、何とかドクターを取得できました。

そんな経緯の中で、新潟大学の職の話が舞い込みました。利根川とともに日本の大河で、ちょうど背中合わせに並ぶ信濃川について勉強できるということで勇んで新潟大学に赴きました。

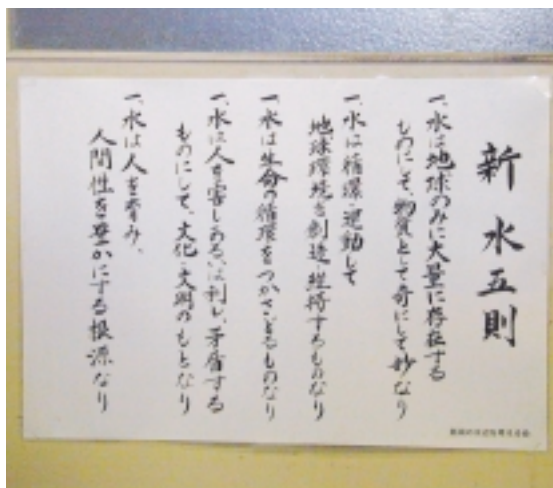
日本で一番面白い越後平野の開発史

越後平野の開発は歴史的観点からも日本で一番面白いと思います。信濃川の大河津分水の着工、中止、堰崩壊、修復など、自然と技術の発展段階との関係がダイナミックに動いてきました。

信濃川については、川沿いのすべての地域に関連したことまで知りたいという思いがありました。現在の信濃川の利用の仕方

工学部
大熊 孝 教授
(専門分野：河川工学、土木史)

利根川とともに日本の大河で、ちょうど背中合わせに並ぶ信濃川について勉強できるということで勇んで新潟大学に赴きました。



川がつくった川、 人がつくった川

著者：大熊 孝

発行：ポプラ社（1995年）



大熊孝プロフィール

大熊 孝

Takashi OKUMA

新潟大学工学部教授
NPO法人・新潟水辺の会会長

1942年生まれ。

東京大学工学部土木工学科卒業。工学博士。

研究課題 ①信濃川の治水の変遷 ②近代化土木遺産の技術的・意匠的・系譜的評価

著書：『利根川治水の変遷と水害』（単著、東大出版会、1981年）

『洪水と治水の河川史』（単著、平凡社、1988年）

『川を制した近代技術』（編、平凡社、1994年）

『市場経済を組み替える』（共著、農文協、1999年）

信濃川の恵みは地元^に落ちることなく、ほとんどが東京に
持って行かれています。本来の川の恵みがもっと地元^に落
ちていたら違った状況になると思います。



は、川の恵みのほとんどが電気にかえられ、川沿いに落ちるべき恵みが収奪されています。例えば、小千谷にはRの大きな発電所があり、東京の電車を動かしていますが、飯山線は電化されていません。阿賀野川についても、尾瀬までⅡ基のダムが階段状にあって発電されているのに、磐越西線も電化されていないという状況です。

本来の川の恵みがもっと地元^に還元されていたら違った状況になっていたと思います。こうした矛盾を解決できる方向にベクトルを向けたいと思いながら取り組んできました。定年まであと6年の任期のうちに解決の方向を見届けて退官できればなと思っています。もっとも新潟に永住するつもりです。死ぬまで関わるかなと思っています。

現在は、田舎に住んでいる人の方が東京に住んでいる人よりもずっと誇りを持って生きているように感じます。それは、時代とともに意識や価値観が変わり、物質やお金に換算できない豊かさがあると実感できてきたのだと思います。その辺の価値観に

私の研究がマッチして受け入れられているのではないかと考えています。

なくしてしまった豊かな日本の自然

縄文時代から高度成長時代に入る前までの日本の自然は豊かで生産力がありました。縄文時代は狩猟・採取社会でありながら定住社会をつくっていました。日本の自然の生産力が高かったため、他の文明では見られなかったことです。江戸時代でも、今考えられるほど貧しくはなかったようです。例えば、何も生産しない良寛さんを養うような豊かさがありましたし、越後には間引きもなかったようです。我々はそんな豊かな自然と共生関係を結ぶ“^{わざ}技”を持っていたのです。しかし、現在はその豊かな自然も“^{わざ}技”もなくしてしまいました。縄文から続いてきた自然をわずかここ40年で破壊してしまったのです。

第二次世界大戦後の窮乏時代に餓死した人はいなかったと思います。しかし、現在

新潟は縄文文化のメッカ。 日本の自然の原点は新潟。

の不況から、もし大恐慌が起きたら、この自然と“^{わざ}技”を失った状況では餓死する人が多く出るのではないかと思います。『国破れて山河あり』といいますが、現在は『国栄えて山河無し』の状態になってしまいました。

市場経済一辺倒で進んできた弊害です。効率という名のもとに普遍的な価値が一つという発想で、多様性がなくなって、足腰の弱い自然になってしまったのです。現在は日本の自然の大転換期にあたっています。残念ながら、縄文からの自然の再生は無理だと思いますが、少しでも回復させる必要があるでしょう。

個々の価値を評価——たわいもないことに感心する心

今後は、効率的生産からの脱却をはからないといけないと思います。市場経済価値とそこからこぼれた価値をどうつなげていくのか。新しいネットワークづくりによる共存が必要になると考えられます。それには個々の価値をもっと評価し、たわいもないことを感心する気持ちや好奇心が大切な要素になってくると思います。

雪は近代技術で克服しきれない存在で、近代的な生活には障害になります。新潟人は雪のお蔭で、いわゆる単純な近代的な都会人になりきっていません。むしろ、そこに大きな価値があるのではないのでしょうか。

日本の自然の原点は新潟——自然と共生を目指す学生は新潟大学へ!!

世界最古の土器は新潟の上川村から出土しています。「新潟は縄文文化のメッカ。日本の自然の原点は新潟」そして、自然と共生を目指す学生は新潟大学に行くしかない!!とPRしていきたいですね。それと、トキを野生化させたいです。これは、大学の大きなテーマにしてもいいと思っています。



●インタビューを終えて



「水ガキよ、大志を抱け！」

風薫る5月28日の午後、私たちは工学部大熊研究室を訪ねた。脱ダム宣言で有名な「長野県治水利水ダム等検討委員会」の委員や、NPO法人「新潟水辺の会」会長を務める大熊孝教授に、研究の醍醐味を伺うためである。ご多忙のなか、90分のインタビューに応じて下さった。

落ち着いた口調の端々に、我々が高度成長社会

のなかで失ってきた大事なものを回復しなければならない、という強い意志がにじむ。人や川や森のありのままの姿を取り戻すという発想の原点は、どうも大熊少年の生活経験にあると見えた。今の学生には自然に対する興味と知識が希薄で、それが何よりも残念と言われる。よく遊ぶ学生の方が伸びるものだ、とも。「悪ガキがお好きですね」と問うと、「いや、水辺で我を忘れて興じる水ガキがいい」とのお返事だった。なるほど、水ガキですか。利根川や信濃川の研究をライフワークとするに至るその原風景が見えたような気がした。

(教育人間科学部 石坂妙子)

「研究とは何だ！
—新大の知性と地性—」



中田教授のお話に出てきた「音楽の神経科学」や「脳機能解析学」についてもっと知りたい方は、こちらにアクセス！
<http://coe.bri.niigata-u.ac.jp>
 (新潟大学脳研究所脳機能解析学分野)

人間の脳の機能を触らずに解析する方法論と自らデザインしつくりあげたハードをもつて、人間の脳、心に科学的アプローチをする中田力教授。
 「この100人に投資せよ」に選ばれ、文部科学省COE（卓越した研究拠点）を採択した世界へ発信する教授の世界を垣間見る。

人間の脳がどう働くかを
ちゃんと考えなければならない

私が研究しているのは、簡単に言っちゃうと脳がどう働くか、人間の脳の機能なんです。それをどうやってアプローチするかというと、それは今までいろんなアプローチがあったわけです。だけど、それをほんとうにちゃんとやろうということなんです。

ラットの脳を研究しても、わかるのはラットの脳でしょ。ラットの脳がわかってもしょうがないんでね。ぼくらが知りたいのは人間の脳ですよ。人間の心でしょ。たとえば、サルが脳がすべて理解できたとしても、人間の脳とはおそらくギャップがあるわけです。年数でいけば何億年ぐらいの開き。最終的に人間の脳がわかりたいんだったら、人間の脳を対象にしなければならぬ。ここが最初のキーワードです。それがいくらむずかしいからって、それをやれない限りは、理論的には届かない。絶対に。

さらに第二に、サルと同じような脳の機能、体を動かすとか、見るという動作などを追っかけていたんでは、それは人間の脳を対象にする必要がないわけです。だから言語、利き腕など人間の脳の高次機能を取り扱う。だけど言語というものでやっちゃうと、途方もない。複雑系の中でもあまりに細かすぎちゃってわからない。そこで、「音楽の神経科学」というものが出てくるんです。音楽は、言語と同じ人間にしかない脳の高次機能の一つであるということ。そして言語と違って数式化できるんです。言語ではない言語前のプリミティブなものを扱うという意味です。

私はまず医者なんです。患者さんにいやというほど接する。現場にいないとだめですよ。そして、物理学者。テクノロジーが必要です。人間の脳って針を刺せないでしょ。針を刺さないで人間の脳機能を研究できる機械をつくった。人間の脳へのアプローチがちゃんとないとだめ。

脳研究所
 中田力教授
 (専門分野：脳神経学 磁気共鳴学)

ラットの脳を研究しても、わかるのはラットの脳でしょ。ラットの脳がわかってもしようがないんでね。ぼくらが知りたいのは人間の脳ですよ。人間の心でしょ。



中田カプロフィール

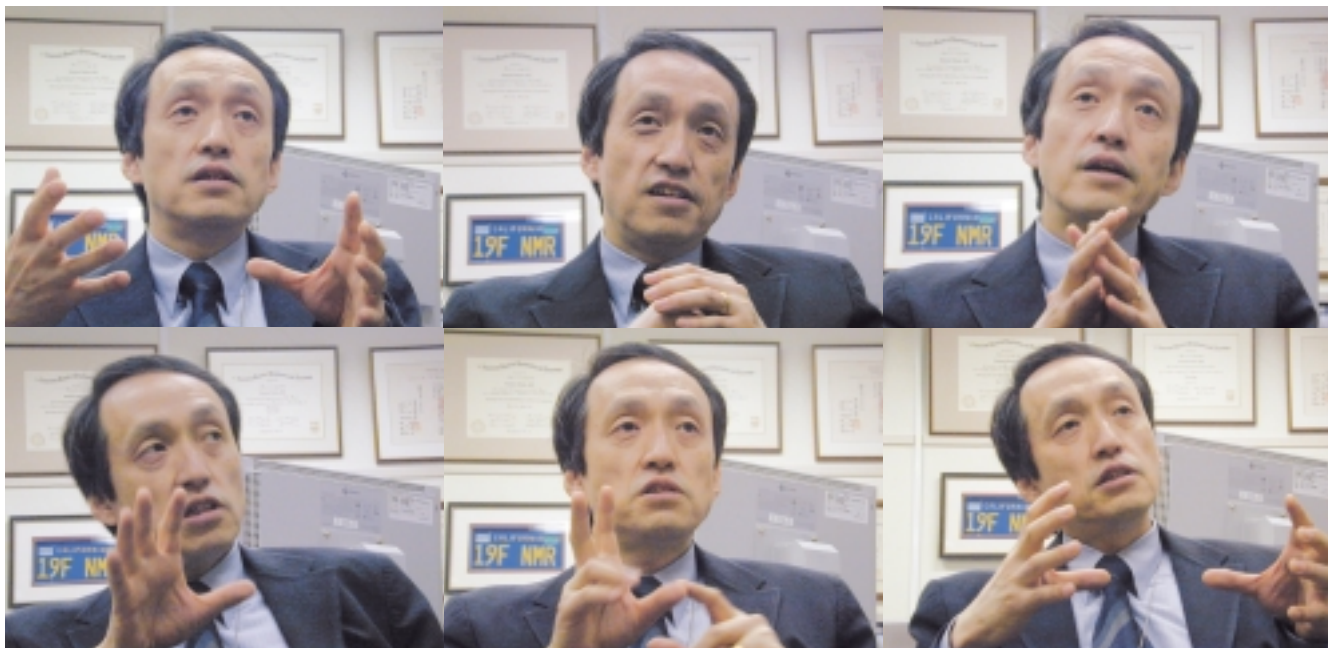
中田 カ

Tsutomu NAKADA

新潟大学脳研究所附属
統合脳機能研究センター
センター長・教授

1950年生まれ。東京大学医学部医学科卒業。カリフォルニア大学・スタンフォード大学にて臨床研修を受ける。1992年カリフォルニア大学脳神経学教授に就任。1996年帰国。新潟大学脳疾患解析センター長として「こころの科学的探究」を目指す文部科学省中核的研究拠点（COE）形成に取り組む。

機能的磁気共鳴画像（ファンクショナルMRI）の世界的権威として国際的に知られており、新潟大学に横型および縦型の2台のヒト用磁気共鳴（MR）装置を有する世界で唯一の研究施設をつくった。



だいたい最初から決断しなくてもいいという前提の情報ばかりで育っていったら、脳は考えるということをしなくなる。

現代は情報過多、脳が勝手に機能を停止 ーセルフオーガナイズーションー

現在の若者の中に分裂症に似た行動をする人たちが多くなってきている。ところが医学的には分裂症という診断はつけられない。なぜかというとバイオロジーとしてどこかが壊れてそうなものとはちょっと違う。幻覚がない。では行動学的にどういう症状かという、前頭前野を使っていない。情報が多すぎるんだね。メッシュの中に絵を描くと思ってください。象さん一つならわかる。だけど、その一つひとつのセル全部に絵があったらどうですか。そうするとノイズになっちゃうでしょ。教育が悪いとかそういう話じゃない。情報をカットしてあげればいい。

だいたい最初から決断しなくてもいいという前提の情報ばかりで育っていったら、脳は考えるということをしなくなる。脳自身が自分勝手にですよ。食って、しゃべって、覚えて、生きるというのには、前頭葉はいらない。言語も使えるし、なんでもできる。

12歳までにちゃんと考えるということ

をしないと、脳は必要ないものになってしまうのね。その意味で数学教育は大切。そして、過程が大事なんだから答え合わせなんてなくていい。結果だけが偉いだなんていってたら、ものに対して判断しなくなっちゃうでしょ。4+8は、なんぞやを考えればいいんだよ。

**カネも要らない、名誉も要らない。
だけどおもしろいことがある。**

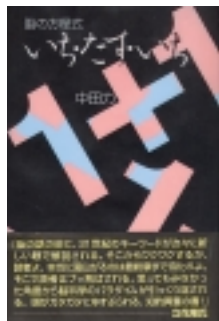
日本になぜ帰ってきたかってよく聞かれるんです。ここ（新潟大学）の人からもまだ数年はいてくださいねって言われるんですが、マグネット背負って逃げられませんかからと答えています（笑）。

給料三分の一になって、出世する気もないし、けどちゃんとした機械（磁気共鳴装置）があって、そこにはおもしろいことがある。ちゃんとやるところを日本にもつくりたかった。

偉くなったってしょうがないしね。偉くなって何かをやらなければならなくなったから、威張んなきゃならないでしょ。根回し

日本はモノをつくっていくものに評価を与えない。
だから、機械を真ん中にエンジニアも入ってみんな
が研究する場所をつくりたかった。

脳の方程式
いち・たす・いち
著者：中田 力
発行：紀伊国屋書店
1800円



もしたくない。だから真正面からいく。コネとか一切使わない。バカ扱いされることもあったけれど、今では真正面からいくのもいいという声も聞かれるようになったでしょ。

日本は、ちゃんとした施設をもっていない

偉くなったってしょうがないしね。
偉くなって何かをやらなければならなくなったら
威張んなきゃならないでしょ。

かった。だいたい、日本はモノをつくっていくものに評価を与えない。だから、機械を真ん中にエンジニアも入ってみんなが研究する場所をつくりたかった。それを「学際性」というキーワードで表現していたらだめだっていう。なんていえばいいの？

また、新しい磁気
共鳴装置をつくる
よ。さらにちゃん
としたものをね。

●インタビューを終えて



「お話に魅了され、気が
つくと2時間30分が経っ
ていた。」

「ご苦労様です」と笑顔で迎えていただいた教授室には、中田教授が受賞された数々のプライズが何気なく飾られ、また教授御愛用？の楽器とMR装置の模型が置かれていました。特集の意図を説明させていただいた後、「それでは最初の質問を。先生の御研究の概要をお話いただけますか」…私からの質問はこれが最初で最後で、

その後は中田教授に主導権を握られ通してでした。それでも、こちらの伺いたい内容は全て網羅して頂き、また具体例を引きながら話される内容は門外漢にも分かりやすく、充実したインタビューとなりました。時間は瞬く間に経過し、(1時間の予定が)気がつくと2時間30分を越えていました。

今回は誌面の制約のため、お話し頂いた内容のほんの一部しか紹介できないのが残念です。今回のインタビュー記事をご覧になって、中田教授の御研究に興味を持たれた方は、著書「脳の方程式 いち・たす・いち」を御一読下さい。

(工学部 鈴木敏夫)

「青春とは何だ！
一歩き始めた若者たち」



好きなことは辞められないです。
やれる環境にある以上
とことんやっていこうと思っています。

自分が今まで励んできたこと

人文学部 地域文化課程 4年

関 洋介



例によって、私も気がついたら4年生になっていた。そしてにわかに就職ムードに包まれる。自分の経験を、面接官の前で「仕事に活かすことができます」と結ばなければいけないような、一種脅迫めいた感覚。

私が4年間やってきたことは、起承転結でいうところの起の部分だったように思う。大学に入って出会ったのはボランティアや市民活動という言葉だった。その周辺で、自宅生お構いなしに朝まで人と話しこみ、つてができては県外、国外まで足を伸ばした。よく分からないからもう少し首を

突っ込む、その繰り返しで頭は混乱しっぱなし。しかし、その無数の問題提起の部分、すなわち「起」が自分の励んできたことの賜物であるように思う。

好きなことは辞められない

教育人間科学部 学習社会ネットワーク課程 3年

庄司 恵

小学生の頃、親に「やりたい」と言って始めたバレーボールが今現在も続き、10年目に入りました。飽きっぽい性格の私が唯一長期にわたって続けていることです。なぜここまで続けられたか今考えると不思議です。高校時代は毎日練習で辛いことがたくさんあり、何度も辞めようと思いました。でも、私にとって数少ない喜怒哀楽の自己表現できる場であるのです。勝ったらうれしいし、負ければ悔しい思いでいっぱい

私が4年間やってきたことは、起承転結でいうところの起の部分だったように思う。

一つのお祭りをつくりあげることは、予想以上に大変です。できること、見えることから準備をしっかりとって、当日は盛り上げられるように頑張ります。

なります。一生懸命やればやっただけこみあげてくる気持ちは大きいのです。そして、「やりたいこと」だからです。なんだかなだあっても好きなことは辞められないです。やれる環境にある以上とことんやっついこうと思っています。



お祭りをつくりあげることの大変さ

法学部 法学科 2年
荒木 光

今、僕は学友会役員として、6月29、30日に開催される黎明祭の準備に取り組んでいるところです。僕の担当は「スポーツ大会」という、新潟大学内の運動系サークルが企画する大会を取りまとめる仕事です。また、毎年行われる黎明祭の風物詩、陸上部主催の「新大駅伝大会」も今回は、僕が中心になって企画・運営しています。

一つのお祭りをつくりあげることは、予想以上に大変です。僕が担当する仕事も、お祭りの一部に過ぎないことを考えると、やはり準備段階における実行委員の苦労は大変大きなものであることが分かります。

今は、当日に企画が円滑に進められるかということで不安がありますが、できるこ

と、見えることから準備をしっかりとって、当日は盛り上げられるように頑張ります。

サークル活動の思い出

経済学部 経済学科 4年
三浦 和香子

今まで振り返ってみて、一番がんばってきたことは、サークル活動です。私は3年間、サークルの活動として留学生が日本語を学ぶのを手助けしてきました。最初は“日本人だから簡単に教えられるでしょう!!”ってたかをくくっていましたが、話せるのと教えるのでは大違いだということがよく分かりました。それでも日本以外の国の方達と話せるのがすごく楽しくて、気づいたらズルズルと3年間もその活動をしていました。今まで15ヶ国以上の方々とお話しをすることができました。新潟にしながら世界各地の人達と友達になることができたのは、本当にラッキーでした。彼らが母国に帰って何十年かして日本で暮らした日々を思い出す時、私のことも覚えてくれてたらいいな……と今、ひそかに願っています。

新潟にいなながら世界各地の人達と友達になることができたのは、本当にラッキーだった。



『～のために』ではなく『～と一緒に』というボランティアができれば最高だ。

『FOR』ではなく『WITH』の精神

理学部 物理学科 2年

後藤 渉

『FOR』ではなく『WITH』の精神。

これは私が理想とするボランティア精神です。私は大学から国際ボランティアを始めました。地域NGO・自治体などと一緒に様々なボランティアをやってきました。これらの経験により私は被ボランティア側の立場も考えなければならぬと痛感しました。本人の自立も考えなければならぬという事です。それを含めてこそ真のボランティアだと思うのです。『～のために』ではなく『～と一緒に』というボランティアができれば最高だと思うのです。また私

は2年になり剣道部に所属しました。これからは『日本文化を世界の人に教え、世界の文化を取り入れる』という、一方的ではない国際交流をしていきたいです。



本人右から2人目

思いがけない始まり

医学部 医学科5年

市川 寛 (話し手)

精松 沙織 (聞き手/医学部 医学科4年)

去年の2月、投票で医学祭委員長になり、僕の医学祭は始まりました。大変らしいし、当時テニス部の主務として多忙だったので一度は断ろうかとも思ったくらいです。

活動の始まりは何からするかもわからない状態でした。仕事の分担がうまくいかな

テストや実習期間中に夜中に集合するようなハードな毎日を乗り越えられたのは、スタッフがよく動いてくれたおかげです。



かったため宣伝活動を全てストップさせたこともあります。テストや実習期間中に夜中に集合するようなハードな毎日を乗り越えられたのは、スタッフがよく動いてくれたおかげです。その結果、自分たちの手で医学祭を独自のものにできて満足しています。今年もそうなるといいですね。

そろそろ医学科だけでなく、保健学科と一緒にもっと盛り上げていければと思います。今年の委員長以下に期待しています。(今年の医学祭は10月26・27日開催です。)

ぼくは野球のために、野球はぼくのために

歯学部 5年

野田 明成 (話し手)

梶田 桂子 (聞き手)

2002年6月1日、W杯初戦カメルーン対アイルランド戦で新潟が熱く燃える中、我が歯学部野球部も全国大会出場を決めた。今回は、ウィニングボールを捕った前主将の野田君にインタビュー！ 野田君が野球を本格的に始めたのは小4の頃。以来受験による中断をはさむものの、持ち前の根気で23歳になった今も野球を続けている。毎日30分の素振りは欠かさない。なぜそれほどまでに野球と向き合うのか。「今の人間関係、積み重ねてきた経験の多くを野球からもらった。他のスポーツをやっている自分なんて想像できない。野球は僕の一部。」

今の人間関係、積み重ねてきた経験の多くを 野球からもらった。

と彼は言う。そんな彼と仲間たちは意識改革に努め、それまでのチームの負け犬根性を打破、今年見事にリーグ優勝を果たした。「ただ野球が好きだから。仲間を信頼しているから続けていける。」全国大会という大舞台でのチームの完成を目指し、彼は今日も素振り続ける。



「楽しい」の発見

工学部 福祉人間工学科 3年
田中 正太郎

大学生活4年間は今しかできないことを思う存分やる時間ではないだろうか。たいていの人が大学後就職をし、決められた枠の中で生活を強いられてしまう。そうなる前にやりたいことはとことんやらなくては損である。私は2002年春、1ヶ月間を東南アジアで過ごした。多くの人、文化、価値観に出会い、人生観を考え直させられた。私にとってこの旅は新しい発見の連続で、

大学生活4年間は
今しかできないことを
思う存分やる時間では
ないだろうか。

「楽しい」のかたまりだった。

酒を飲む、友達と遊ぶ、そんな「楽しい」ではない、自分を変えるような「楽しい」を僕は今でも探しています。

くさいことを書きちゃいましたね。でも若いうちだけだから、少し感情的にもなるだろうし、本当に楽しければ人から何を言われても気にならないだろうし。何年も先を見て「さめてるなぁ」って感じる人もいますよね、命と時間はとり戻せないですから、大事にしていこうと僕は思います。

大学を面白くするには

農学部 農業生産科学科 2年
村山 貴規

みなさんの大学に対する満足度、大学生である自身に対する満足度は、何%でしょうか？ちなみに、僕の場合は、前者が40%、後者が50%です。このように、僕は、自分の意識を明確にし、客観的に判断することを習慣付けています。例えば、この習慣を大学の諸活動に当てはめたとします。現在、総合研究棟の建設、教養棟の改修、道路の舗装など、大規模な工事が、行われています。これに対し学生は、不満や疑問を抱きつつも、意見を交わす相手や機会がないため、わかっちゃいるけど、悶々とした日々が続いています。今、僕はこの状況に楔を打とうとしています。この楔は、黎明祭、大学祭といった大学行事から、大学の日常のいたる所に現れます。その楔に、敏感に反応し、異議を唱える人が、どんどん現れ、議論と実践の充実した大学になることを期待し、僕の話を終ります。



楔に敏感に反応し、
異議を唱える人が、
議論と実践の充実した大学になる
ことを期待します。

患者さんが教えてくれたこと

「先生、今日ね、すごく幸せな気分になったんだ」

「すごいね。どんなことがあったの？」

「あのね。学校サボって近くの土手を犬と散歩してた時にね、空を見上げたら空がとても青かったの。それを見たらすごく幸せな気分になったんだ」

これはある女子高校生との会話である。彼女は勉強に興味をもてない、学校に行きたくないと訴えて、自ら精神科の外来を受診した。ちょっとした友達とのトラブルをきっかけに、何に対しても意欲を失ってしまい、学校を休みがちとなり、軽いうつ状態に陥ってしまっていた。親にはただ怠けているだけだと苦しい胸のうちを理解してもらえず、先生方からはもっと頑張れと叱咤激励され、にぎやかな友達との会話に加わることも友達に悩みごとを相談することもできず、彼女は**自分自身と自分の居場所**を見失っていた。彼女は学校のこと、友達のこと、家族のことなど、今まで誰にも言えなかったあるいは聞いてもらえなかった自分の気持ちを病院に来て少しずつ吐き出していく中で、明るい本来の自分を取り戻していった。冒頭の診察の日、彼女は、もし何も考えずにただ学校へ通っていたらきっと見過ごしていたであろう青空を、悩み、自分と向き合う中で発見することができたのだらう。この日の彼女はすごく晴れ晴れとした表情をし、久しぶりの笑顔を見せた。その後、彼女は学校の保健室の先生など診察室以外にも相談する場を広げ、部活動にも積極的に参加し、今まで窮屈でしかなかった学校生活の中に自分なりの居場所を見つけ出していった。「将来大学に行って、興味のある分野の勉強をしたいから」と苦手な勉強にも取り組むようにもなった。初診から数ヶ月間後、「自分一人でも大丈夫」と笑って学校に戻っていった。その数ヶ月間で、彼女は自分の心の中にもきれいな青空が広がっていることに気がついたのかもしれない。

彼女の言葉から、その日一日中外来診療に追われて、青空どころか窓の方向にさえ目を向けていない私自身に気がついた。たまには彼女のように**空を見上げる余**

保健管理センター 講師
鈴木 由紀子

裕を持つことも大切なのだと彼女に教えられたような気がした。はたして今の私は、自分の心の中に青空を見つけることができるのであろうかと自問してみた。

最近、**自分自身がわからない、友達と付き合う方法がわからない、何のために学校にきているのかわからない、将来何をしたらいいのかわからない**と悩んで保健管理センターに来る学生さんが多くなっているように思う。ちょっとしたきっかけで自分の目標を、あるいは自分自身や自分の居場所を見失ってしまうという事は、珍しいことではないのかもしれない。時間に追われるような毎日の中で、自分を見失わず、また周りに流されることなく生活していくのは結構難しいことなのかもしれないと思う。そういう行き詰まった時や目標を見失った時には、彼女が空を見上げたようにちょっと立ち止まり、周りを見まわして自分の位置を確認してみることも必要であるように思う。また一人だけで考え込まず、周りの誰かに自分の気持ちを話すことも大切だろう。

自分の目標は自分で見つけるしかない。でも、そのきっかけを作る手伝いが少しでもできれば、病院の診察室や保健管理センターのカウンセリングルームが**心の中の青空を発見する場**、そして実際の生活を送る上で**必要なエネルギーを獲得する場**となれば良いと思うながら、日々診察を続けている。

保健管理センター【五十嵐地区】

Tel.025-262-6243 Fax.025-262-7517

旭町分室【旭町地区】

Tel.025-227-2040 Fax.025-227-0748

利用時間／8:30～17:00（土・日曜、休日は除く）

こちら就職部

就職相談事務室から

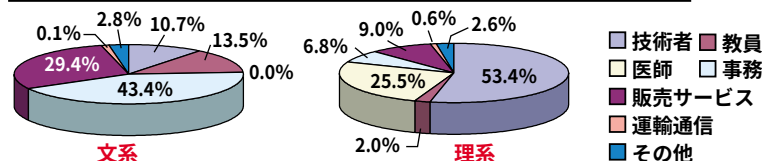
近年の厳しい雇用情勢のなか、新潟大学の就職率は、みなさんの先輩たちの健闘により、アップしています。また来春卒業を迎える、現4年生の方からも就職相談事務室へ内々定獲得の報告がたくさん寄せられています。

大学卒業後のキャリアについて考え始めた1、2年生の方も、就職活動を間近に控え、業界研究をしている3年生の方も、一度就職相談事務室へ足を運んでみてください。きっと有力なヒントが得られるはずです。

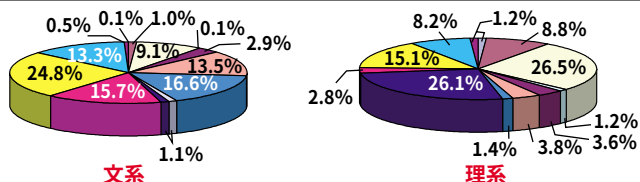
平成13年度就職関係データについて

職業別就職状況（学部）

	技術者	教員	医師	事務	販売サービス	運輸通信	その他	合計
文系	84	106	0	340	230	1	22	783
理系	266	10	127	34	45	3	13	498



	農林漁業	建設業	製造業	電気ガス水道	運輸通信	卸売小売	金融保険	不動産業	医療保険	教育	サービス	公務員	その他	合計
文系	1	8	71	1	23	106	130	9	9	123	194	104	4	783
理系	6	44	132	6	18	19	7	0	130	14	75	41	6	498



就職関係メールの配信について

就職部では、学生みなさんに、就職関係情報（求人情報、ガイダンス日程、会社説明会日程等）を総合情報処理センターから学生向けに配布されているメールアドレスに配信しております。

インターネットや求人票では、掲載されない重要な情報ばかりですので、必ず目を通してください。

●学生用電子メールの利用法●

今年度より、総合情報処理センターから配付される電子メールアドレスを学生全員が利用できるようになりました。パソコンのある場所なら、どこでも利用が可能です。

1. 総合情報処理センターのHP (<http://www.cc.niigata-u.ac.jp/>) を開く
2. [学生向けサービス] をクリック
3. ユーザー認証。ユーザー名とパスワードを入力してください。（学務事務システムと共通のアカウントです。）

進路が決定した4年生のみなさんへのお願い

平成15年3月卒業予定の皆さんは、卒業後の進路が決定次第、進路内定届を所属する学部の学務係へ提出してください。就職先が内定した時、また大学院、専門学校への進学が決定した時のほか、その他の道に進む場合でも提出は必要です。

みなさんから、提出された内定届は文部科学省や厚生労働省を始めとする各種調査に対する報告の基礎データとなるばかりでなく、就職活動体験記も含めて提出していただくことによって、後輩の就職指導の参考等になるため、本学として正確に把握しておくためのものです。

就職部就職相談事務室

TEL : 025-262-6531、6087 FAX : 025-262-7516

Email : shushoku@adm.niigata-u.ac.jp

利用時間 9:00～17:00（土日、休日は除く）

「人間として生きたい」―ハンセン病元患者の声を聞く―

今回の全学講義は、講師にハンセン病元患者の裾雄二（こだまゆうじ）さんをお招きして、5月20日午後4時30分から90分にわたって行われた。裾さんは7歳で発病して以来、70歳の今日にいたるまで、人生のすべてをハンセン病療養所で過ごされた。現在も草津の国立療養所栗生楽泉園に入所しておられ、ハンセン病国家賠償訴訟全国原告団協議会・会長代理として、患者の人権回復のためにたたかっておられる。お話の内容は、ご自身の個人史とこの問題の社会史を巧妙に織り交ぜながら、わが国のハンセン病問題の悲劇を浮き彫りにするものだった。

会場はほぼ満席で、各学部の教官や学生が多数聴講した。特に広報はしなかったが学外からの聴講者も多く、反響も大きかった。新潟日報社説（5月25日付）では、「開かれた大学」の試みとして高い評価を受けた。山本正治医学部長が最後の挨拶の中で「私たちの普段の講義を何百万回繰り返しても得られない内容」と話されていた通り、聴講した学生は大きな感銘を受けたようで、「自分の無知を恥じる」、「衝撃を受けた」という感想が多く聞かれた。

企画した側の感想を若干述べさせていただくなら、今回の講義は「憐れみ」の視線を元患者の人たちに向けようというものではなく、裾さんのお話しを通して「医学や科学の＜知識＞とはそもそも何か」を聴講者に考えてほしかった。

細菌学のようなミクロの領域から疫学のようなマクロの領域まで、医学知識のほとんどは、病気についての＜事実＞を明らかにしようとするものである。しかし、医学には＜事実＞を知るだけではすまない複雑な知識領域がある。それは、データの解釈から医療政策の選択にいたる、人間の＜評価＞をめぐる問題群である。ハンセン病問題をあえて一言でいうなら、＜事実＞を前にした人間の＜評価＞の問題だった。かつてハンセン病の専門家とされる人々が、遺伝病と感染症とを混同した医療政策を進めるという＜評価＞上の誤謬をおかした。ハンセン病問題の悲劇とは、この＜評価＞上の誤謬が、戦後半世紀にわたって修正されることなく続いた点にある。この誤謬を正そうとした勇敢な医学者もあったが、当時の医学者はこの人物を正しく＜評価＞することさえなかった。

医療や科学技術の＜評価＞の問題は、かくも人間の生死や、生の尊厳に直結している。だからこそ、欧米諸国では、こういった知識についての「ELSI」つまり「倫理的・法的・社会的な側面」を複合的にとらえる文理融合的な種々の学問が発達してきた。筆者が専門にしている生命倫理学もこれに含まれるし、医療政策論といった分野も発達している。しかし日本では、残念ながらいまだこのような領域が学問として確立しているとはいえない。今回の試みが、ささやかながら本学ひいては日本での「ELSI」の発展に寄与することを願う。それによって、長谷川彰学長が最初の挨拶で述べられたように、「専門を深くきわめたばかりでなく、広い視野をもち、ものごとを総合的に判断する力を身につけた人材」が育つのではないか。

そういう志を持つ若い人が、多数の聴講者の中から一人でも現れた時に、この企画は報われる。

（文責：医学部保健学科・宮坂道夫）





新潟大学五人の学生が、 おぼれた少年を救助

—学長による学生褒賞—

平成14年7月7日（日）午後4時30分頃、五十嵐浜で遊泳中に溺れかけた少年二人を新潟大学の学生、サーフィン仲間の五人が救助。

その学生五人が、学長より褒賞され、大学名入りのメダルが贈られました。



工学部機能材料工学科	3年	大津 潤	（おおつ じゅん）
工学部機能材料工学科	3年	佐々木貴之	（ささき たかゆき）
工学部機能材料工学科	3年	千野隆之	（ちの たかゆき）
工学部機能材料工学科	3年	益田秀之	（ますだ ひでゆき）
工学部機能材料工学科	3年	渡邊 隼	（わたなべ はやと）

新潟日報—2002年（平成14年）
7月9日（火曜日）—に掲載。新潟
西署と新潟西消防署は五人の行
動を「勇敢だった」とコメント。

整備された五十嵐中心地区

歩行者、自転車、自動車の交通量が最も錯綜するメイン・ストリート中心部への自動車の乗り入れを禁止するとともに、慢性的な自転車駐輪場問題を解決し、五十嵐中心地区を歩行者を主体とした安全で快適な場所にしようというものです。これにより学際的地域基幹大学にふさわしいキャンパスへとイメージアップを図りました。

(注意点)

- ・ 自転車は歩行者道を走行できません。
- ・ 自転車は決められた自転車置場に止めてください。



凡 例

- 歩行者道・広場
- 自転車優先道
- 緑地
- 自転車置場

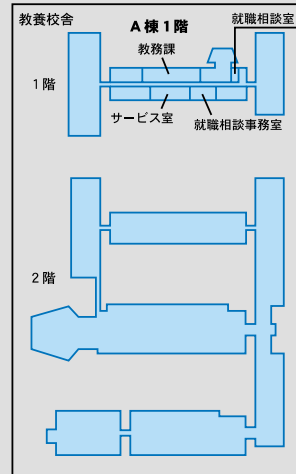


教務課、サービス室、就職部の一時移転について

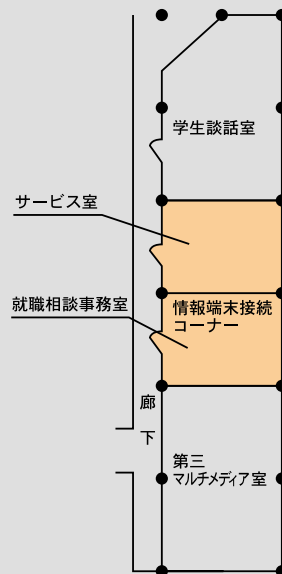
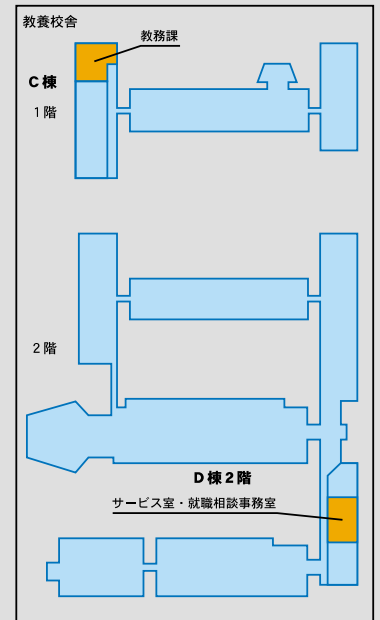
五十嵐地区総合教育研究棟(旧教養校舎)にある「学生部教務課」、「学生部サービス室」、「就職部・就職相談事務室」の各事務室が下図のように一時移転(平成15年3月までの予定)します。8月8日(木)～8月9日(金)に各々移転作業を行う予定ですが、窓口業務は行います。

学生部

現 在 地



移転先(仮事務室)



↓
D棟2階
拡大図

新大広報 BackNumber

- ▼141号〈特集：総合大学としての新潟大学の魅力〉
- ▼142号〈特集：総合大学の魅力—すべてが教材—〉
- ▼143号〈特集：卒業、退官〉
- ▼144号〈特集：大学生生活入り口ガイド〉

バックナンバーが欲しい方は、事務局の学生部学生課まで受け取りに来て下さい。

学生編集委員 編集後記

一言に、楽しかったです。1ページ1ページの雰囲気をつくり上げていくなかには、編集にたずさわるひとりひとりの想いやセンスがたくさんまざりあっているのですね。

●阿宮由子（教育人間科学部4年）

何かを始めようと思っても、なかなかはじめの一步が踏み出せません。けれど、この新大広報学生編集委員というお仕事は新しい自分に出会える『はじめの一步』になりえるものです。昨年からメンバーチェンジを繰り返しながら、既に20人以上の学生が関わりました。あなたにとっても、すばらしい一歩になるでしょう。いっしょにやりませんか？

●宮崎道名（教育人間科学部3年）

今回、大学生の表情を写真撮影して感じたこと。それは、当然のことであるが建物などと違い常に静止しているわけではなく動きがあるため思うようには撮影できなかった。そして、人物の撮影の難しさを感じた。また今回は教育実習と重なってしまい、あまり活動できなかったのが残念だった。

●大島康輔（教育人間科学部3年）



新大広報のバックナンバーは、<http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp/kouhou/>でも見ることができます。大学の魅力を先輩たちが語っています。ぜひ、どうぞ。

※連載しておりました「世界の都市」は今回お休みしました。

新潟大学広報誌 学生編集委員 募集!!

自分で投稿した記事や写真がどのようにしてできるか。あるいは、新大広報の編集会議に参加して、新大広報の制作に参加しませんか。

■問い合わせ先：学生課（262-7330）
または各学部の広報委員まで。

編集後記



「新潟大学とは何だ!」という問いに答えるべく二つの特集を企画しました。まず、「研究とは何だ!」として、編集委員が選んだ新潟大学で輝いている3人の教授に登場していただきました。人文学部の古厩忠夫教授からは、20世紀を象徴する言葉としての「裏日本」についてのお話、工学部の大熊孝教授からは、信濃川の豊かな恵みを通じて「日本の自然の原点は新潟」というお話、脳研究所の中田力教授からは、「知りたいのは人間の脳であり、人間の心」と世界に発信しているパワフルなお話をお聞きして、インタビューにでかけた編集委員達がまずそれぞれの先生方の魅力の虜になってしまいました。限られた誌面ではその一部しか紹介できませんでしたが、みなさんも、是非、直接お話を聞くチャンスをキャンパスでみつけて下さい。「青春とは何だ!」では、インタビュー取材を含め、9人の若者のそれぞれの青春を語ってもらいました。「キャンパスあれこれ」では、ハンセン病元患者さんからの全学講義の雰囲気を伝えてもらい、基幹環境整備の紹介、健康コラム、こちら就職部と盛りだくさんの内容になりました。ホットなディスカッションがくりひろげられている編集委員会のパワーを145号から感じていただけたでしょうか。新大広報のモデルチェンジが確実にすすんでおり、学生編集員の参加も定着してきました。次号以降に向けて、活発なご意見をお寄せいただくとともに、編集へのご参加をお待ちしております。

（編集委員長 山内春夫）

広報委員会第1部会

● 部会長	仙石 正和（学長特別補佐）	Tel 262-6751	sengoku@ie.
● 編集委員長	山内 春夫（医学部）	Tel 227-2141	daba@med.
● 委 員	井山 弘幸（人文学部）	Tel 262-6573	
	石坂 妙子（教育人間科学部）	Tel 262-7116	ishizaka@ed.
	谷 喬夫（法学部）	Tel 262-6493	tani@jura.
	濱田 弘潤（経済学部）	Tel 262-6538	khamada@econ.
	石田 昭男（理学部）	Tel 262-6145	ishida@env.sc.
	川瀬 知之（歯学部）	Tel 227-2927	kawase@dent.
	鈴木 敏夫（工学部）	Tel 262-6780	suzuki@eng.
	青柳 育（農学部）	Tel 262-6620	qingliu@agr.
	藤野 邦夫（医療技術短期大学部）	Tel 227-2362	fujino@clg.

● 事務局（学生部） Tel 262-7330 Fax 262-7515 gakusei@adm.
（E-mailのアドレスは、niigata-u.ac.jpの表記を省略しています。）

● 新潟大学ホームページ <http://www.niigata-u.ac.jp/>

● 新潟大学学生部ホームページ <http://ksws1.ge.niigata-u.ac.jp>

この広報は再生紙を使用しています。